温かい手を掴んで

緋絽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
温かい手を掴んで

【Ｎコード】
Ｎ２１７３Ｒ

【作者名】
緋絽

【あらすじ】
いつもの暮らしに新しい風が吹き込んできた。
太陽のように笑う彼に、私はついつい巻き込まれてしまう。

※完結しました

温かい手を掴んで　第1話

いつからなのか、あなたの温かい笑顔、言葉に私は惹かれていた。
こんな気持ちを初めて知った。
まるであなたは太陽――。

朝。学校に遅れそうな私はとにかく急いでいた。商店街の中を全速力で走る。
まだ朝は早いのに開店準備の人と会社や学校へ向かう人々で商店街は結構混雑している。周りにぶつかりそうになっているが気にしてられない。
前で同い年ぐらいの男の子がおばさんと何か話していた。なんか道を尋ねているらしい。
「あ～ええわ！！おおきになおばちゃん！！」
ダッとこちらに走ってくる。
まぁいいや。気にしてられない！！
その男の子との通り過ぎ際、男の子の隣にいた人が男の子にぶつかった。
「えっ！！」
「えっ？」
男の子の体が傾いて私にぶつかった。地面に倒れこむ。
「いたたたた…」
「あたた…こらぁ！！ぶつかっといてゴメンナサイの一言もないんかい！！」
ぶつかった人はそのまま走り去ろうとしていたらしく、渋々というように頭を下げると走っていった。
「なんやあれ！！どないなってんねやこの街は！！」
かっ、関西弁！？さらりと風に揺れる黒い髪と同じくらい真っ黒な

綺麗で人懐っこそうな瞳。
男の子は私に気付くとすまなさそうに笑って手を差し出してきた。
その手を取って立たせてもらう。
「ごめんなぁ怪我ない？」
「は、はい…大丈夫です」
「そんなら、えかった」
安堵の溜め息をついてまた笑う。なんか、人を安心させる笑顔だなぁ…。
「あ、せやぶつかっといてなんなんやけど…大河学院ってどこか知っとるか？」
「た、大河学院なら私が通ってるところですけど…？」
「ホンマか！？ほんなら話は早いなぁ！！」
一気に男の子の表情が明るくなる。
「えっ？」
「えっ？って言っとる暇ないで～？あんたにそこまで案内してもらうんやから！！」
「ちょっ、ちょっと！！」
「俺の名前は晃。藤堂　晃や！！あんたは？」
「し…城宮　玲奈…」
「ふ―ん、えぇ名前やなぁ」
「そ、そう？ありがとう」
なんだか照れてしまう。お世辞なのだとわかっていても、やっぱりこういう風に褒められるのは照れくさい。
「おぉ！！そんなんより早よ行かんと遅刻してしまうで」
「うそ！！やだもう予鈴鳴っちゃってる！！」
「そしたら急ごか！！玲奈！！」
「うん！！」
私は走りながら彼に聞いてみた。一体うちの学校に何をしに来るのかを。
「なんや、聞いてへんのか？俺、今日から2年に転校するんやで！

！」
「え？私も２年…」
晃は２回目を瞬かせるとプハッと笑った。
「ほんならお友達第１号やん！！なかなか溶け込めれてないようやったら助けてや！！」
「アハハ！！あなたが溶け込めないなんてことはないわ！！だってこんなに喋りやすいのに！！」
「そんなことないで！！」
そんな会話をしたあと息切れで苦しくなった私はほぼ無言のまま学校まで走り、学校に着くと晃はお礼を言って職員室なほうに走っていった。
私は本鈴が鳴る直前に教室に駆け込んでギリギリ遅刻にならなかった。

温かい手を掴んで　第1話（後書き）

あまり上手に書けませんが、どうかよろしくお願いします。

温かい手を掴んで　第2話

「転校生が来ています」
思わずそれに反応する。
いや、まさかね…。ありえないありえない。朝会った人が同じクラスでした～なんていう奇跡は。
「大阪からの転校生です、どうぞ」
先生が呼ぶとあの彼が扉を開けて入ってきた。大きく口をOの形に開ける。
あ、あった…！！奇跡発見！！
「藤堂　晃君です」
口を開けて驚いていると晃は私に気付いて顔を明るくした。
「お―！！玲奈やないか！！さっきぶりやなぁ！！」
「え、あ、う…」
勢いにつられてガクガクと頷く。ニコニコと嬉しそうに晃が笑っているのを見てちょっとうろたえた。
う、犬みたい。可愛い。
「なんだあなた達知り合い？それならちょうどいいわね、あなた、慣れるまでお世話係ね」
「えぇ！？」
「よろしゅう？」
「え…」
突然の急展開に頭がついていかない。
あれ、なんかお世話係りを今言い渡された？あぁ、そっか、お世話係りね。
…って、え――っ！！
「な～なんで怒っとるんや？な～な～玲奈ぁ」

ざわざわと転校生に興味津々の騒がしいクラスの中、晃が周りの目線を気にせずに言った。
「別にっ怒ってなんかないわ！！」
「怒っとるやん」
シュルシュルと指で私の髪をいじりながら晃は聞いてきた。髪の間を晃の指が滑る。
せっかく整えてきた髪をいじられて怒らない人のほうが少ないのではないだろうか。
「……っ人の髪いじるのやめてよ」
「おうっこれで怒っとったんかい。別にええやないか減るもんでもないやろぉ」
「減るもんでもって…あ―の―ねぇ！！こう見えても髪だけは手入れしてるのよ！！」
寝癖がついてたら命がけで死ぬほど櫛を通すぐらい！！
「…こう見えてって？」
ガタンと机に晃が座った。
「だから…」
髪を整えながら晃の方を向いて――――思っていたよりも近い距離にドキッとした。
う、おぉう。なんか、ちょっと照れるじゃない。
「こ、こう見えてよ」
「なんやそれぇっ！？」
プハッと晃が笑った。
…つくづく思うけど笑顔が明るい人だなぁ。目尻が下がって優しい感じの雰囲気になる。
「俺は玲奈の髪綺麗やと思うけどなぁ？」
首を傾げながら晃が私の髪を一房手にとってからさらりと流す。頬に軽く爪が掠った。
顔が一気に熱くなる。
…っ、ぎゃー！！て、てて天然？あんな屈託なく笑いながらよく

もあんな台詞が言えるものね！！
「あ、ありがと」
「おぉっ！！ところでなぁ玲奈。このガッコは購買あるんか？」
「あるわよ？それがどうかし…」
「よっしゃあ俺行きたい！！」
「あっ、こらっ、ちょっとどこ行くの！！」
晃は机から降りるやいなや脇目も振らず走っていってしまった。
あぁもう！！子供じゃないんだから！！
その後私が晃に追いついたとき、晃は数人の男子に囲まれて談笑していた。

温かい手を掴んで　第2話（後書き）

中途半端で申し訳ありません。
これから書くのは少し長くなってしまうので…。
次回、頑張ります！！

温かい手を掴んで　第3話

「お前ってほんとに面白いなぁ」
「そ―か？おおきに！！」
「ちょっとっ、晃っ、な、何してるのよっ！！」
走りすぎて息がきれる。
「お―！！玲奈！！遅かったやん、何してたん？」
晃が首を傾げる。
可愛いけども！！
「あんたが早すぎるんでしょ！！」
「あ、城宮さんだ」
「え？あぁどうも」
誰？この人。かなりの間見つめられる。
「……？何か？」
「えっ！？あっいや別に何も！！」
アハハと笑って誤魔化される。
「？」
その男子は晃のほうを向いて肩に腕を回すとクルッと私に背を向けた。他の男子も輪になるように集まっている。
「おいっ藤堂っ！！お前城宮さんとどういう関係なんだよ！！彼女下の名前で呼んでんじゃん！！」
「え？友達！！今朝会うててん」
「友達！？いいなぁ―！！俺も城宮さんと友達になりてっす！！というかそれ以上に！！」
何か話してる。何話してるんだろう。
「……なればええやん。なんでならへんの？」
「いやっ恐れおおすぎる！！あの可愛さとか可愛いのにク―ルなところとか犯罪級じゃね！？それで笑顔とかマジ堪らんです！！」
「なんやお前～玲奈のこと好きなんか！！」

「俺の他にもいっぱいいるぜ～？彼女になってほしい！！って言ってる奴なんかさぁ！！お礼とかキッチリ言ってくれるから人気あるんだよ～」
「ふ―んそうなんや～」
「あっお前城宮さんには内緒だからな！！」
「え～どないしよ！！」
「おい！！」
「私がどうかした？」
「いやっ何も！！」
弾かれたように振り返る。
「？」
「……」
晃がジイッと私を見つめる。
「なっ何？」
「玲奈って　　カワエエんやなぁ」
「えっ　　」
顔が熱くなったのがわかる。
「なっなっ何っ急にっ」
「いや～」
周りの男子も呆気にとられている。でも私の顔を見るとまた晃の肩に腕を回すと私に背も向けた。
「なっ！？めちゃくちゃ可愛い！！」
「うん、そやね可愛い思うわ」
「だよな～！！」
話している内容は聞こえないが私はそれどころじゃなかった。
こんの天然タラシめ！！
「晃、早く行かないと休み時間なくなるわよ」
「はっ！！せやった！！じゃあ！！」
また風のごとく走っていってしまった。
「あっ　　こらっ！！」

「あ、城宮さんバイバイ！！」
「え、あ、うん」
手を振って別れる。私は知らない。後ろで男子達が嬉しそうにいつまでも手を振っていたことを。

温かい手を掴んで　第3話（後書き）

まだまだ続きます！

温かい手を掴んで　第４話

「晃！！も―早く行っちゃわないでよ！！私、自慢じゃないけど特別足速いわけじゃないんだからね！！」
「ごめんごめん！！楽しみすぎやったんよ」
「こっ購買が？」
「おぉ！！」
ニコニコと笑う。
「そ、そっか」
「うわ！！すげぇ、マジでパン売っとる！！」
はしゃいでいる晃を後ろから見る。
本当に、犬みたいね。
「大阪にはなかったの？」
「う―んあるガッコもあったみたいやけど、俺のところはなかったんや」
品物を見ながら晃が答える。
「へぇ、意外。大阪って都会のイメージあるからない学校なんてないのかと思ってた」
「そう？」
晃が手に持っていたパンの代金を置きながらこちらを振り返った。
「うん」
予鈴が鳴る。
「あ、時間ね。行こうか」
「あぁ、そやね」
教室に戻るとここぞとばかりにたくさんの人が晃の周りに集まってきた。
晃は友達を作らなきゃいけないし、それなら私と一緒にいるより一人のほうが皆話しかけやすいでしょうね。
自然に晃の傍を離れようとする。

ビンと髪を引っ張られた。
「きゃ…！！」
「どこ行くんよ、おってや」
「ちょっと！！髪は引っ張らないでよ！！痛いじゃない！！それに、私以外にも友達は必要でしょ！！」
「そうやけどさぁ！！俺、意外に人見知りなんよ？」
「どこが！！」
「あっ酷い！！」
ウルウルと泣くふりをする。
「～～～～っ」
「玲奈は俺のことが嫌いなんや…だから俺の近くにおるんが嫌なんや…」
「べっ、別に嫌いなわけじゃ…っ」
「じゃあ、おって」
ニッコリ笑って言われた。
「……っ」
クラクラする。
私が傍にいるほうがきっと友達できにくいわよ。人っていうのは誰かが傍にいると話しかけられない生き物なんだから！！
「なっ玲奈！！」
「～～～っわかったわよ　　」
「やったぁ」
「で？いつまで髪、掴んでるつもり？」
「あぁスマンスマンつい綺麗やなぁって思ってしもて」
「！！」
まったくこの人は…。彼にとってこれはただのスキンシップだとわかったからもう何も思わないけど、下手したら、〝この人私のこと好きなんじゃ！？〟って思う人いるかもしれないわよ？
変な人…。
手を引っ張られて膝の上に座らされた。

背中に晃の体温と息遣いを感じて――――一気に顔が熱くなった。
「!?なっ何するの!!」
焦って立ち上がろうとすると晃の腕が腰に回って空いている方の腕で引き戻される。再び晃の膝に戻って更に焦った。しかも腕が離れないっ!!
ぎゃー!!う、うううう腕が腰にー!!
「どっか行かんように載っけとこ思て」
「変態っ!!離しなさいっ!!」
「い―や―や―離したら玲奈絶対どっか行くも―ん」
「行かないわよ!!」
約束するから勘弁してください。恥ずかしすぎます。降ろしてー!!
「ぷっ…」
「!?」
クスクスと周りから笑い声が聞こえる。
「え…な、何?」
「意外…っ、城宮さんって結構慌てるんだね」
「え?」
「なんかいつも冷静なイメージあったー」「私もー」
「そんなことないわよ、いつだって心の中はパニクってるんだから」
「アハハそうなんだー」
ワラワラと周りに女子が集まり出す。いや、別に仲が悪かったわけじゃないけど特別仲よかったわけじゃないから少し嬉しい。
「フフ、そうなの」
皆がジイッと見てくる。
「……?なぁに?」
「城宮さんって可愛いよねぇ。モテるのもわかるなぁ~」
「えぇ!?わ、私、モテないわよ?告白だってあんまりされない…」
「でも何回かはあるんでしょ?」
「え、えぇ」
「一回もされない子だっているんだから~モテるんだよ城宮さんは」

「そ、そうなんだ」
「そうだよ～」
ハッと気付く。
「ちょっと、晃！！私だけこの人達と話してるじゃないっあんたもなんか話しなさ…」
晃は後ろを向いて男子達と話していた。
「晃～その人達と話すなら私を離して！！意味がないでしょ～！！」
「ごめんごめん、えぇやん別に～不快感はないやろ？」
テヘッと聞いてくる。
「そういう問題じゃないのよ」
パシッとでこピンする。晃はおでこを押さえて悶絶していた。その隙に立ち上がる。
「あぁ！！」
「甘いわね、でこピンされても離さない精神力をつけなさい」
「あんまり関係なくないですか？」
「何か言いまして？」
「いえ別に」
周りが爆笑している。
「え？」
「なんやなんや～おもろいことでもあったん？」
「ふっ2人って…っ仲良いね…っ」
「ぶっ…くっくっくっ」
「そうやで？だって俺玲奈がこっちでの一番最初の友達やも—ん。な～玲奈」
ふぅと溜め息をつく。
「そうね」
「あっ酷いっ玲奈溜め息ついたぁ～」
「別に酷くないでしょ！！」
そう言いつつも笑っていた。

温かい手を掴んで　第４話（後書き）

か、関西弁難しい…！！

温かい手を掴んで　第5話

――　数日後　――

「モデル？」

帰り道、駅前で声をかけられた。

「そう！！やってみない？」

「え…」

「ダーメーでーすーやめてください、行こう玲奈ちゃん」

「え、あ、う、うん」

織ちゃん（ちょっと前に初めに話しかけてくれた子）が手を引っ張って歩き出した。

「あっちょっと待ってよ」

「しつっこい！！どっか行って！！」

不満そうに向こうへ消えていく。

「……」

「いい？玲奈ちゃん、ああいうのには気をつけてよ？玲奈ちゃんみたいに可愛い子を売ってやろうって思ってる人だっているんだから、もしやる気なら絶対親と一緒に話をしに行くんだよ」

初めてああいうのされたなぁ。ビックリした…。

「玲奈ちゃん？聞いてる？」

「え、あ、うん。大丈夫、するつもりないから」

「それならいいけど…」

織ちゃんが溜め息を吐く。

「あ、この店行ったことないや。行ってもいい？」

「いいよ～」

そうしてこの日は乗り切った。

だけど、その日から無言電話とか家に毎日誰かが手紙を送ってくるようになった。

毎晩携帯にかかってくる電話に私は怯えるようになった。

プルルルと電話の音がした。
体を竦ませる。
「はいもしもし～」
あ、なんだ晃のか…。ホッと溜め息をつく。
晃が電話を切る。少し考え込んでから私を見て首を傾げた。
「なんかあったん？」
「え？」
「携帯にビクッてなってたやろ」
「な、なってないわよ」
「いいやなっとったね」
「なんでよ」
「なんとなくや」
「何それ」
プハッと吹き出す。
「……まぁ」
ポンと頭を叩かれた。
「なんかあったら話聞くわ」
フッと笑う。
「お節介」
「うっさいねん」
「…大丈夫よ。何もないデス」
「それはよかった」
そう言って晃は向こうに行ってしまった。

温かい手を掴んで　第5話（後書き）

短い…。

温かい手を掴んで　第6話

その帰り道。
ふと足を止めてみる。足音も止まった。
「……」
こっ怖い　　！！ストーカー！？
強く鞄の紐を握り込む。
「……っ」
後ろを振り返ってみる。
…誰もいない…。
再び歩き出す。足音も歩き始めた。
やだ！！怖い！！
角を曲がる。
お願い、早く、家に帰りたい…っ！！
あの角に向かって走り出すと足音が急に早くなった。馬鹿！！どうせストーカーするなら足音消してしなさいよね！！…それも嫌かも…。
心臓が早鐘を打ち出す。
この人より早く道に出なきゃ…！！そうじゃなきゃ何されるか…！！
すぅっと背中が冷えた。
早く道に出なきゃ、私、何されるの？
体が震えだす。
あと少し…っ！！
足音が近くなった。
手が伸びてきている気がする。
やだ…っ誰か…っ！！
角を曲がろうとする。
もうそこまで手がきている気がして息が浅くなる。
「嫌…っ」

ドンッと誰かにぶつかった。
後ろに倒れそうになる。
「！！」
ガシッと手を掴まれた。心臓が冷えた。
「やだ…っ！！離して…っ誰かっ誰か　　っ！！」
「ちょっちょいっ玲奈っ俺や俺っ晃や晃っ」
ぶつかった人物が私の腕を掴んで言った。
「や…っ」
「玲奈っ俺や言うとるやないかっ！！」
ハッと我に返る。
「あ、晃　？」
「そうやっ晃やっ」
安心して地面にへたり込む。
「わっ何っ？」
晃が私の腕を離そうとした。
「！！まっ待ってっ」
手を握って後ろを振り返る。
誰もいなかった。
よかった…晃がいてくれて…いなかったらきっと後ろを振り返れなかった　　。
「で？何しとるんや？」
晃が震えている私の手を見て言った。
「…ううん。なんでもない」
「なんでもなくないやろ！！見てみこんなに震えてるやん」
握ったままの手を持ち上げて晃が言う。
「一人で少し怖かったのよ、私結構怖がりだから」
「そんな…！！」
「ありがとう、晃。じゃあね」
手を振って別れようとする。だけど言葉とは裏腹に手は晃の手を離さない。

「あ　　あれ？ごめん、今離す…」
グイッと手を引っ張る。
「あ、あれ？」
早くしないと晃が疑っちゃう。聞かれたら答えられない。あんまり人に知られたくない。
晃が溜め息をつきながら笑った。
「えぇよ、もう暗いし家まで送るわ」
「えっでもっ　　」
「どうやら俺とは手ぇ離しとうないみたいやし？」
「ちっ違うわよっ！！」
「はいはいわかってますて～」
「～～～っ馬鹿晃っ」
「はいはい」
温かい手を握るとすごく安心した。きっとこの手に守られる人はずっとこんな気持ちでいられるんだろうな。そう思ったら少し胸が苦しくなった。
そうしていたら家についた。
「あれ、なんか届いて　　」
カタンと音をたてながら封筒を取る。心臓が嫌に早鐘を打った。
また、あの手紙――。
ギュウと晃の手を握る。そんな私を見て晃は手紙をヒョイと取り上げた。
「あ…っ」
「なんやこれ？差出人書いてへんやんけ」
「それはっ」
「うわぁ、こない気持ち悪いもん捨ててまえ！！うおっしかも玲奈宛てやんっ今までもこんなんきとったんちゃうやろな！！」
「えぇっと…それ…は…」
ギクッとしてしどろもどろに答える。
「きとったん！？いやぁ！！怖かったやろ！！」

「だ、大丈夫！！変なものじゃないよ」
「ほんまに～？」
「ほんとほんと」
「そんならええけど…」
「ありがとね、また明日」
「せやな、おやすみ」
バタンと中に入った。

ふぅと晃は溜め息をついた。
「女の子は難しいんやなぁ」
ジロッと暗い道を睨む。
「……」
ジャリッと音を立てて帰っていった。

温かい手を掴んで　第６話（後書き）

よろしくお願いします！

温かい手を掴んで　第7話

――――――　1ヵ月後　――――――

体が水をかぶる。
「うわっ」
「あぁっごめん玲奈ちゃんっ水かかっちゃった！！」
水道にホ―スをつなごうと織ちゃんが頑張っていたところに私が通りかかって運悪く水をかぶってしまった。
「だ、大丈夫…多分…」
「ほんとごめん！！」
「いいよ、その代わり」
蛇口をひねって織ちゃんに向ける。
「え？」
「織ちゃんも濡れて　」
「えぇぇぇぇぇ！！」
激しくホ―スが揺れて水が噴き出した。
……私に。何故。
織ちゃんが私を見て大笑いしている。
「な、なんで！？」
「へ…へたくそ玲奈ちゃん…っ」
「もーー！！」
突然織ちゃんが顔色を変えて慌てたように私の前に立った。
「どうしたの？織ちゃん」
「緊急事態発生！！す、透けております！！」
最後のあたりをがふんげふんと濁しながら小さい声で言う。
「えぇぇぇぇぇ！！」
あまりの衝撃につい叫ぶ。
「どっどっどうしよう」
「あれ―？玲奈―？何しとる……ってうわ！！びしょびしょやん！

！」
「え、う…あ、あんまり見ないでほしいんだけど…」
胸を隠すように織ちゃんの後ろに隠れる。体が冷えて身震いした。
「大変や！！玲奈が風邪ひいてまう！！それはあかん！！」
そう言うと自分のカッターを脱いで私にかけた。
「というわけでこれ着とき」
「え…」
「すぐ着替えぇよ」
「あ、ありがと…」
「あ、これも使い」
肩に持っていたタオルをかけられる。
「髪拭く時に使うて」
「…どうもすみません」
「よかったやん玲奈！！俺まだ使うてへんで！！まだ汚れてへんから思う存分使うたらええ！！」
「別に使っててても汚いなんて思わないわよ」
「アハハ、言うと思った」
「何よ」
「いーえーそれではね」
トイレに移動して着替える。
カッターを着ると晃の香りが体中からした。
う…っ地味に恥ずかしいな…。
外に出ると織ちゃんに笑われた。
「ブカブカだね―！！」
「うるさいわねっもともと誰の所為よ！！」
「私、私。ごめんって」
まだクスクスと笑っている織ちゃんに牙を剥く。
「もうっ」
袖を折りながら教室に入ると全員が私の方を見た。
「え…な、何…？」

ブバッと男子が鼻血を出す。
生まれて初めて人が鼻血を噴くのを目にした。
「あー玲奈にはちょっと大きすぎたんやな」
「晃」
「まぁカワエエから、ええか」
「なっ…」
顔が熱くなったのがわかる。
この男！！またさらりと言ったわね！！
「アハハ、赤くなった」
「うるさいっ」
ポンポンと晃の肩を男子が叩いた。
「？なん…」
「晃てめぇ！！いつの間にそんなおいしいことを！！でも可愛いからある意味グッジョブ！！」
「グエエエ苦しいねん、早よ離して～」
「絶対離さん！！」
「嫌や～！！」
思わず笑う。
その日の帰り。
「あっ晃っ」
「ん？おぉ玲奈、どしたん？」
「こっこれっ明日洗って返すから　　っ」
「あぁ別にええのに。よろしゅうお願いします」
「うっうん　　」
なんだか妙に晃の顔を見るのが恥ずかしい。
「じゃあ」
ポンと頭を叩かれた。
「また明日」
心臓が鼓動を打ち出す。ギュウと苦しくなった。
「また…明日…」

晃が笑って立ち去った後、
喘ぐように息をした。

温かい手を掴んで　第7話（後書き）

後数話で終わります！

温かい手を掴んで　第8話

それから人気の多い道を選ぶようにしたからかあのストーカーには追われなくなった。
恐らく。
だが――。
家に入る前にポストを確認すると一通手紙が届いていた。
私宛て――！！
家に入って部屋で手紙を開けた。
『あの男は誰？君の何？あの服はあいつから借りたんだろ。なんでそういうことするんだ。ああいうのはちゃんとしておかないと勘違いする奴がいるんだから気をつけなよ。今度あいつが何かしてきたら僕が助けてあげるからね』
体が震えて手紙を落とした。
「あ　　落としちゃった　　」
拾いながら手が震える。怖い。この手紙の人は私をいつもどこからか見ているってことだ。
ハッとしてカーテンを閉める。
「……っ」
携帯を開いて電話をかける。
発信先は――晃。
怖い…怖いよ…！！助けて晃――！！
『もしもし、玲奈？』
「あ…」
ハッと我に返って口を押さえる。
〝今度あいつが何かしてきたら僕が助けてあげるからね〟
もしかして　　私を助けるって晃を傷つけるってこと！？ダメだ

…！！晃を巻き込みたくない！！
『もしも―し、玲奈あ？どうしたんや何かあったん？』
「…え！？あ、あれっ晃！？うわぁもしかして私間違えてかけちゃった！？ごめん織ちゃんにかけようと思ってたんだ、ちょっと急ぎの用事だから切るね」
『え、あ、そうなんや……ほんまに何もなかってんな？』
「ないよ―！！それじゃ、ごめんね―！！また明日！！」
『うん、おやすみ―』
電話を切る。膝の上に携帯を降ろす。電話が切れた後の電子音が流れている。
頬を涙が伝わった。恐怖に体が震える。
怖い。助けて。誰か――！！

その頃、晃は――。
切れた携帯を閉じる。
「んー…」
ベッドに寝転がる。
携帯を持っている手とは逆の手に一通の手紙が握られていた。
内容は――。
『彼女に近付くな』
なんちゅう牽制の仕方や。相手の顔見て直接言う意気地はないんかい！！あっても困るけども！！
俺の理解が出来る範囲で推測すると、〝彼女〟っていうのは玲奈のことやろな。っていうことは玲奈があの日持っていた手紙は同じ奴からやと思ってええんやろう。
溜め息をつく。
「…よっしゃあ！！やるでぇ！！」
勢いよく起き上がる。
「…まず風呂入ってこよ」

―――――　翌日　―――――

今日は朝から晃が話しかけてきた。
だけど避けてしまう。どのくらいなら晃を巻き込まないでいられるかわからないからだ。
そうこうしている間に放課後になってしまった。
「城宮！！今日さ、日誌書いといて！！」
「え―！！しょうがないなぁ」
「悪い！！俺今日委員会あってさ―！！」
「いいって。行ってきなよ」
「ほんっとごめん！！じゃあ！！」
「は―い」
教室では当番の人達が掃除をしている。その中に晃もいた。なんとなく安心して書き始める。
「欠席者は、3人…っと。よしっ」
確か先生は職員室にいるはず。鞄は　　まあ後で取りにくればいいか。
出来れば皆と一緒に帰りたいし。
日誌を持って教室を出た。
職員室で日誌を渡してそこを出ようとすると先生に呼び止められた。
「あ、そうだ。城宮、ちょっと頼まれてくれ」
「なんですか？」
―――　生徒に配るプリントの印刷を頼まれてしまった。ウィーンとプリンターが動く音がする。
あぁもう！！皆と一緒に帰りたいのに！！早く終われ！！
ただプリンターは機械音を鳴らして紙を吐き出していた。

―――　晃　―――

「晃～帰らねえの～」

「あぁ、うん。ちょい気になることがあるんや」
玲奈のまだ置いてある鞄を横目で見て言う。
「へぇ、そうか。じゃあまた明日〜」
「ん〜」
「あ、晃まだ帰らないんだったらちょっとしてほしいことがあるんだけど」
「何？」
――ゴミ捨てを頼まれてしまった。ついでに中の掃除も。
『俺今日１００ｍ．の計測があるんだよ〜悪い！！』
ってあかんやん！！こんなことしとる場合ちゃうねん！！なんでか今日は玲奈捕まらへんし！！
「ああークソ！！」

――　玲奈　――
やっと印刷が終わって教室に戻るともう誰もいなくなっていた。
「あ―やっぱり…」
仕方なく鞄を持って教室を出た。もう既に時刻は7時前　。うっすらと空が暗くなっている。
校庭に出ると生温かい風が吹いて寒いわけでもないのに身震いをしてしまった。
まるで、悪いことが起こる前兆のように――。

――　晃　――
あれからおよそ２０分後に晃は教室に走って帰ってきた。
肩で息をしてゴミ箱を床に置く。
玲奈の机にあるはずの玲奈の鞄がない。
「お…おらんし…」
音を立てて鞄を掴むと急いで教室を出た。

俺にあんな手紙を送ってきたっちゅうことはあっちはいつもこっちを見てるってことや。
もちろん帰りも。あの日――――玲奈とぶつかった日、玲奈はそれに気がついて逃げとったんやろう。
あの時はまさか身近でそんなこと起こらへんやろと高をくくって放っておいたけど、あの時からもう少し警戒しておくべきやった。
もしかしたら玲奈に何かするかもしらん。可能性は十二分にある。
「クソ！！」
靴を履いて転がるようにして校門を出た。
出来ればそんなに遠くに行っとらんとええ。もしくはせめて、人通りの多い道を選んでくれれば――――。
「玲奈…っ！！」

温かい手を掴んで　第8話（後書き）

次がラスト！！

温かい手を掴んで　第9話

――――　玲奈　――――

7時を過ぎているためか、周りは真っ暗だった。
というより全然周りに人が見えない。人っ子一人いない。
怖い。
思わず体が震えた。夜の闇はなんとなく何か出そうで、この年になってもそれは変わらず頭に染み付いている。
この闇の中に飲み込まれてしまうのではないかと――。
しかも最近はストーカーが私を見ていると気づいてしまったから尚更だ。
大丈夫。誰もいやしないわ。こんなところに人なんて――。
ふと歩くスピードをあげる。男のストーカーに気づいてからの癖だ。
耳を澄ませても後ろから足音は聞こえない。
よかった。このまま何も起きなければあと10分ほどで家に着く。
安堵して顔をあげると塀に男がもたれかかっていた。
息が止まるかと思った。
その男の周りの空気が、闇と同じように感じて――。
鞄の取っ手を掴む。その指が頼りなく震えた。
その男の前を通り過ぎる。
安心して体の力を抜く。
――と腕を掴まれた。
「――っ！？」
「久しぶり玲奈ちゃん」
「だっ誰っ！？」
「覚えてない？駅前で会ったじゃん」
「え…」
〃モデル？〃

〝そう！！やってみない？〟

あの時の――――！！

「な、なんですか」

「手紙、読んでくれたんだね。ちゃんと覚えててくれて嬉しいよ」

「なっ何言って…っ」

「ね、あいつと関わりを断ってくれたのは俺のためだよね」

「は！？」

「ありがとうじゃあ俺はやっと君に」

掴まれている手に力が入る。

「やっと触れられる」

「……！？」

引っ張られて抱きしめられる。

背筋に悪寒が走る。

「やっやだ！！離して…っ！！」

「玲奈…」

体が硬直する。振り解きたいのに力が入らない。唇が動かない。声が出ない。恐怖に呑まれた。

「……っ」

手が頬に動いた。

〝玲奈〟

晃の声が響いた。まったく人が人を想う気持ちは恐ろしい。会いたいという衝動が体の奥底から突き上げてきた。

会いたい。晃。

私はこんな奴に犯されるつもりはない。

唇を強く噛む。口の中に血の味が広がった。それを飲み下す。

戻ってきて。この体は私の物よ！！誰にも好き勝手させない！！

鈍い痛みによって段々体の感覚を取り戻していく。

フッと体の力を抜く。男の力が少し緩んだ。その瞬間をついた。
力任せに突き飛ばす。
「うわっ」
男が地面に倒れ込む。
「ふざけないで！！私はあなたのために晃と関わらなかったわけじゃない！！」
男の体が震える。
走って逃げる。後ろから追いかけてきているのがわかった。
怖い。捕まったらどうなってしまうのか。その想像をかき消すように走ることに集中する。
腕を掴まれた。
「っ！！」
息を呑むような悲鳴が口から零れた。
男の方に体を向けさせられる。首に指が絡まった。絞められていく。
「～～～っ」
気道がひしゃげて息ができない。
晃…っ！！男の手を掴んで首から外そうとする。
周りの景色がぼやける。息ができず、涙が出た。
助けて…。もう一度晃に会いたい。このまま晃に会えないなんて…。
今、私にとって一番残酷なこと。
手を伸ばす。何を掴むでもなくその手は力なく垂れた。
あきら。口だけ動かして呟いてみる。声は出なかった。
「何してんねんおっさん！！」
急に視界から男が消えた。膝から崩れ落ちる。肺に酸素が入ってきた。確かめるようにして息を吸い込む。今の声――――。
「玲奈！！」
「晃…」
涙で視界が滲んでいたが、それでもわかった。
晃が男を後ろから抱え込んでいた。男を放る。
「あんた今何しようとしてたんかわかっとるんか！！」

「玲奈に触れようと…」
「ちゃう！！殺そうとしてたんや！！殺人やぞ！！」
晃の声を聞いて周りの家からちらほらと人が出てきた。
「違う、玲奈に、触れようと」
男の手が私に伸びる。
その言いようのない恐怖に体が強張った。
晃が男の手を掴んで捻りあげた。
「うっさいわボケ！！玲奈に触んな！！」
周りにいた一人が晃に話しかけた。
晃がそれに応えるとしばらくして警察が駆けつけた。
地面に座り込んでいる私に晃が声をかけた。
「玲奈、大丈夫か？」
「…うん…」
体が震えている。殺されそうだった。殺意を感じた。
「…ごめん…やっぱり無理矢理にでも玲奈に話しかけとくんやった」
その言葉に反応する。
「無理矢理…？」
「俺んとこにも手紙きてな。今日らへんになんかしてくるかもて思っとったんや」
「…そう、なの…」
「ごめん。守られへんかった。気付いとったのに　　」
「別に、いいの…」
そばでしゃがんでいる晃の手を握る。
会えた。もう一度。涙が頬を伝った。ゆっくりと晃の手が背を撫でる。
「会えたから、いいの…」
晃の胸に顔をうずめた。晃の手が静かに私の肩を包んだ。

温かい手を掴んで　第9話（後書き）

今回で終わるはずでしたが、思ったより長く、明日まで続きます！
！

温かい手を掴んで　第１０話

――――――　後日　――――――

あれから警察で色々と話を聞かれてしばらくしてから家に帰された。
両親は私を助けてくれた晃に涙を流さんばかりに感謝していた。
別れ際、晃はいつもの笑顔で手を振った。
今日私はあれから初めて学校に出る。
精神的なものなのか、あの晩から私は熱を出して寝込んでいた。
「行ってきます」
ドアを開けて外に出る。門を出ると晃が立っていた。
「おはようさん」
「…おはよう…」
ぎこちなく笑う。なんとなく顔を合わせづらい。
「もう体の方はええの？」
「うん。もう平気」
門を閉めて歩き出す。
晃は相変わらず脳天気で馬鹿で…。それなのにあの時の晃はとてもしっかりしていた。あの手が酷く頼もしいものに感じられた。私は晃のその手に縋った。情けなく縋った私の手を晃はゆっくりと包んだ。安心した。
あの時の晃を思うと、とても顔を真っ直ぐ見ることなんてできない。
頑張って目を合わせようとすると、顔が熱くなるのだ。
ふと思った。あの時だけじゃなかったかも。もっと前から――――。
後ろから人の歩く音が聞こえた。
思わず体を竦ませる。
隣を女の子が歩いていった。安心して体の力を抜いた。
それを見て晃が少しだけ口元を引き締めた。
「怖いん？」
「え？」

「後ろからの足音気にしとったから」
「…ちょっとだけね…」
無意識に晃の服を掴む。こうすると守られているような気分になるから不思議だ。
「……」
晃がその手を掴む。その手は心地いい温かな手だった。
「俺がおっても？」
「え？」
思わず顔を上げる。
「玲奈」
「今なんて？」
「俺が守るって言ったら、玲奈は安心できる？」
「…でき、る…」
「それなら傍におってもええ？」
「でも…それじゃあ晃を利用してるようなものなんじゃ…」
「ええよ。玲奈が安心して俺の隣で笑えるんならそれでええ」
強い目だった。ドクリと鼓動が跳ねる。
その瞳に思わず引き寄せられる。
「なんで…？」
それを聞いて晃は照れたように笑った。晃が手を少し強く握る。
「それはなかなか言いにくいことやね。ただ――」
「……？」
見上げていると晃が繋いでいる手を持ち上げた。
「この手をずっと繋いでいてくれるんなら頑張るわ」
「！！」
それに答えるように握り返す。
「…馬鹿…」
「ええねん。俺、馬鹿やも――ん」
いつかこの手が私から離れることがあるだろうか。温かい、この手が。その時私はどうするだろう。泣き叫ぶだろうか。涙で顔をグシ

ャグシャにして。それとも――。
どうなるかなんてわからない。
それでも、この手だけは。
空を仰いで息を吸った。
太陽が煌めく。この手と同じ温かい光で私を照らした。

温かい手を掴んで　第１０話（後書き）

はじめまして。
関西あたりの方言を使ってみたいなあと思い、使ってみたはいいものの、非常に難しい。なんとかなるだろうと思っていたら、見事になめるな！！という感じでした。
恐るべし、関西弁。
なので間違っているところが多々あると思われます。どうかご了承ください。

読んでくださり、ありがとうございましたm（＿＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2173r/

温かい手を掴んで

2011年10月8日19時19分発行